

平成30年度 第1回 高浜市誌編さん委員会			
日 時	平成30年11月6日(火) 午前10時00分～11時30分		
場 所	高浜市いきいき広場 会議室A	傍聴人数	0名
出席者	委員	神谷純一 曲田浩和 石川伸 村松輝一 後藤恵理 宮田克弥 中川健二 尾崎ヒロミ 神谷坂敏	
	事務局	こども未来部 文化スポーツグループ 同	部長 大岡英城 リーダー 鈴木明美 主任 日吉康浩
		株式会社ぎょうせい	土屋和重
次 第	1 あいさつ 2 委員長・副委員長の選出 3 議題 (1) 部会活動の進捗状況について (2) 普及・啓発活動について (3) 執筆内容(案)について (4) 全体スケジュールについて (5) 「たかはま 歴史・まちづくりシンポジウム」について 4 その他		
資 料	資料1 各部会の主な活動状況 資料2 執筆内容及び担当割案 資料3 発刊スケジュール(案) 別紙 たかはまアーカイブ(市広報) 別紙 「たかはま 歴史・まちづくりシンポジウム」チラシ		

平成30年度高浜市誌編さん委員会【第1回】

平成30年11月6日（火）

1. あいさつ

【大岡部長】2020年の市誌発行に向けて、各部会が精力的に活動し、いよいよ執筆作業に入っていく。多くの皆様のご協力により、昨年度及び今年度と順調に調査が進んでいるので、今回はこれまでの進捗状況をご確認いただき、全体としてさらにいい方向に進むようご指導をお願いしたい。

2. 委員長・副委員長の選出

※委員の互選により、委員長に神谷純一委員、副委員長に曲田浩和委員が再選。

【神谷委員長】誠に非力ではあるが、皆様と共にしっかりと務めさせていただこうと思う。実際の編集に関しては曲田副委員長にお任せしていて、今のところ大変順調に進んでいると聞いている。沢山のご意見を頂戴したい。

【曲田副委員長】市民の方をはじめ、様々な方のご協力によって、これまで知られていなかった多くのことがわかってきた。また、郷土資料館資料もほぼ整理が終わり、大量の未整理だったダンボールがなくなりつつある。これまで資料がそこに存在することがわかってきたものの、調査が進んでいなかった案件について、この事業をきっかけに調査に入ることができた場所もある。これも市誌のひとつの成果だと思う。刊行まで残り2年しかないが、その間に一生懸命できることを行っていきたい。

3. 議題

(1) 部会活動の進捗状況について

<事務局 資料1に基づき説明>

【委員】コークスを拾っている写真や、だるま窯を燃やす時に使っていた材木の切れ端を県外から運んできた時の写真など、窯業の燃料に関する資料も続々と見つかったので、そういったものも活かしたらいいのではないかと思う。それがあって街中が真っ黒になった。そういう時代を掘り下げていかないといけない。

【委員】吉浜の神明社に亜炭鉱があったと聞いているが、あの燃料を高浜が使った可能性もあるということか。

【委員】実際に亜炭鉱があったと聞いている。

【曲田副委員長】調査については古写真をいろいろな方がお持ちで、また掲載にあたって選別をするのは大変な作業である。なお、今現在の写真を撮る場合はこれからの一年が最後である。まとめた時に、全て同じ季節の風景になってしまってはいけない。今撮っておかないといけないものは地元の方でないとわからない情報もあるので、ぜひ皆さんにご協力いただきたい。

【委員】風景がどんどん変わっていってしまうので、カメラマンが1～2人ではとても追いつかない。

【神谷委員長】時代の流れにより、いつの間にか今まであったものがなくなって、新しい住宅等に変わっていく。気づかれた方はどんどん情報を提供していただきたい。

(2) 普及・啓発活動について

<事務局 別紙（たかはまアーカイブ）に基づき説明>

【委員】各町内を全て網羅するのか？

【事務局】特定の地区に偏ることなく、紹介できたらと考えている。古写真と今の風景を比較することで、この記事が世代を超えた会話のきっかけになればよいと思う。

【曲田副委員長】1回1回の記事だけを見ても情報が少ないので、ある程度連載したところで編集しなおして、冊子のような形にすると、これはこれでいい資料になる。

【委員】自分は18年程しか高浜に住んでいないが、昔のまちの姿は知らないことばかりなので、色々知ることがとても刺激になっている。

(3) 執筆内容(案)について

<事務局 資料2に基づき説明>

【曲田副委員長】通常の市史は、どういう施設ができたとか、どういう施策で行政が進めてきたかなどが中心だが、それだけで大変なボリュームになる。高浜市誌は全時代・全分野合わせて1冊にするので、施策あるいは施設等に重きを置くと、それだけで本が終わってしまう。なので、できるだけその辺りは取捨選択させていただいて、できる限り「人々の暮らし」に力点を置き、どのように人々の暮らしが変わってきているか、市民主体のまちになってきたかという記述にしていきたい。第4編第6章ではできる限り人の動きをうまく入れたい。窯業製品を製造する人だけではなく、燃料を作る人、製品を運搬する人と、

様々な人が関わっている。そういったところに基点を置きたい。そして、現代から未来の「大家族たかはま」に繋がっていくようなかたちにしていきたい。

【委員】公民館活動の他に、まちづくり協議会ができて10年になるが、その辺りのことはどこに入ってくるのか。

【事務局】第4編第6章に入ってくるかと思うが、まだ全ての細かい内容を今の段階では明記していない。人々の暮らし・活動という意味ではここに入ってくると思う。

【委員】婦人会は少ししか残っておらず、青年団はなくなってしまった。人々の活動は昔と大きく変わってきている。

【委員】平成5年に部制から町内会制へ変わり、さらにはまち協ができた。その辺りの流れをここに入れるといい。

【委員】自分たちでできることは自分たちでやろうということで立ち上げた。

【委員】第4編第2章の行政区画の再編とは部制から町内会制への変化も入るのだろうか。その辺は整理してほしい。

【曲田副委員長】そのあたりについては、来年度に生活誌部会が聞き取り調査を行っていききたい。市誌本編に盛り込めない部分が多々出てくるかと思うので、『高浜市のあゆみ資料』として別冊にしていくことを考えている。現在のまちのかたちも、紆余曲折があってここまでできている。なくなったものもあれば、活発だったものが衰退していったものもあると思う。なので、記録として残すべきものについて、市誌本編だけで収まらない部分は、他の方法を考えていく。

【委員】そうすると、市誌というのは、社会生活に影響を与えたものを書き記していくということか。

【曲田副委員長】市の大きな流れのなかで、最終目標として「大家族たかはま」というところがある。これに向かって、人々が「自分たちのことは自分たちでやる」という精神で何を行ってきたかを取り上げていく。ただ、活動のすべてを書き記すことはできないので、取り上げられなかった部分は違う形で紹介していく。今回の市誌は、もちろん読み物としての部分もあるが、この内容についてはこの資料を読んでもくださいという索引的な部分も盛り込んでいく。先史・古代・中世で1冊、近世・近代で1冊、現代で1冊という他の市史のようなタイプは目標にしていない。様々なエッセンスを紹介し、更に調べたい時はここで調べられますよというインデックスの役割を持たせるということも考えている。本文の中で、まず一番最初に私が執筆することになるかと思う。「人々の生活に重点を置いて作

ったため現代の部分が厚くなっている」「色々な要素が入っている市誌を、こんな風にご活用ください」というメッセージをそこで盛り込みたいと考えている。

【委員】私の個人的な感覚かもしれないが、旧三村(高浜・吉浜・高取)は昔は繋がりが少なかつた地域だっただろうと考えている。中学に行くと、苗字も産業も違う。また、執筆内容案を見ると、近世のところで西端村 VS 高取というところがあるが、私の祖父の話だと、どちらかと言うと高棚との交流が多かつたという話も聞く。

【神谷委員長】本郷は高棚、論地は西端とのつながりが深かつたのではないか。田畑や水の問題が大きいので。

【委員】吉浜と言えば鶏、高取と言えば農業。そんなイメージがある。今でも高取は田んぼが一番多く、安城や碧南ともほとんどが田んぼで接している。

【委員】高取は養豚が盛んというイメージ。病気が流行つた時は大変だつた。

【神谷委員長】高取で花火を作つていたという話も聞いたことがある。

【委員】花火は吉浜でも作つていた。

【曲田副委員長】出来上がると色々なご意見が出ると思う。各地区で高浜市誌を見る機会を作るといいと思う。高浜市が旧高浜村を中心に動いていたことは間違いないと思う。そうなると吉浜、高取の方はあまり良く思わないということもあるかもしれない。ただし、今回の編さん事業のなかで、高浜、吉浜、高取全ての地域から資料が出てきた。資料があれば語ることはたくさん出てくるので、地域の方がたくさん議論ができるとよい。その際に、自分の地域だけでなく、他の地域のことも考えてもらいたい。市誌が完成した時には、各地域でワークショップ等を開いてもらえるといいかと思う。

【委員】過去の市誌を発行して40年経っている。その後に別冊で薄いものが10冊程出ているが、それはどういう流れで出来たものなのか。全て入りきらなかつたからそういう形になつたのか。

【事務局】もちろん市誌に入りきらなかつたという部分もあるが、どちらかと言うと市誌が発行された以降に出てきた新しい資料や新しくわかつてきたことなどをまとめたものである。なかには、市誌ができるより前に、市の文化財保護委員の方がまとめたものを新たに編集し直したものもあつたりと、色々なパターンがある。市誌に付随する資料という位置づけである。

【委員】あれを全て網羅するともつと資料が厚くなる。お祭りや細工人形、別冊で養鶏や瓦もあつた。専門的にみるとそれらの冊子はとても役立つ。

【曲田副委員長】高浜町誌・市誌を執筆した方が非常に限られていて、その資料がほとんど残っている。市誌資料の原稿だとかそれに関わる資料なども全て残っている。これだけ過去の町誌・市誌の原稿や材料が残っているところはないと思う。お隣の安城市は、昭和30年代に作った時の資料はほとんど残っていない。その反省を踏まえて、新しい市史を編さんした時には、保存室を作ってしっかりと資料を保存している。高浜は以前に作った町誌や市誌をふまえて調査ができることは大きいと思う。なので、今回集めた資料もしっかり残せるようにしていきたい。

【委員】私たちの生活を見ると、スーパーやコンビニでも外国の方を多く見かける。幼稚園にも外国の子が多い。第4編第6章で「ニューカマーの暮らし」とあるが、これはどういった方を対象に調査しているのか。例えば高浜に何十年も住んでいる方か？

【事務局】ニューカマーの暮らしというのは非常に切り口が難しく、誰を抽出したらいいかが非常に難しいところで、事務局内部でも検討している。例えば他市町では国際交流協会などがありそこを窓口にしていけるが、現在の高浜市にはそういった協会がない。市の通訳を通して聞いてみると、現在高浜市には外国人のコミュニティなどの集まりもないという。事務局として一番身近なのはポルトガル語の通訳さんなので、その方を窓口にしながら調査していこうかと考えている。ただ、ある特定の方から話を聞くとその方の「自分史」になってしまう。それが一般的なものなのかというところが問題である。ここは来年度聞き取りをする名古屋市立大学さんとも検討が必要である。誰を対象にするのか、どんな内容を聞き取るのかを検討しなければならない。

【曲田副委員長】その点は慎重に扱わないといけないと考えている。市誌の本編に載せる部分、生活誌の編に載せる部分、冊子になる部分と、分けざるを得ないと思っている。ひとつ中心になるのが、既に孫まで3世代にわたって高浜市に住んでいる方たちである。彼らは、自分たちの故郷はどこなのか悩む世代である。第3世代となると、両親・祖父母も日本にいるため、日本に馴染む。第2世代は、祖父母がブラジルにいるから帰った方がいいのでは、と言うような悩みがでてくる。3世代くらいで考えられるような方がうまく見つかればと思っている。その辺りをまず生活誌の中で作っておいて、その方の周辺を追いつつ、現代誌の中でどう執筆できるかがポイントになる。今8,000人程のニューカマーがいるが、書き方によってはその方々の変遷で終わってしまうかもしれない。書きにくい題材ではあるが、ここにチャレンジしようという意見が、現代史や生活誌の先生方から出てきている。幸いに生活誌の部会長である佐野先生はフランス言語が専門で、社会学

的・国際的な感覚を持っているので、人種・民族に関して非常に詳しい。市誌でそういう先生が入ることは稀であるので、そういう先生を交えて話ができることの良さを活かして、できるだけチャレンジしようと考えている。ただし、出来上がったものに文句が出てきてはいけないので、慎重に検討していきたい。

【委員】書き方は非常に難しいと思う。高浜の特色として、ブラジルや東南アジアの方などがたくさん住んでいるというところがある。それらの外国の方々がかうまく高浜に馴染んでいくような市の取り組みがたくさんあると思う。例えば、祭りに参加を呼びかけたり、高浜小学校でのフットサルには多くのブラジルの方が参加されていて、日本の子どもたちと楽しくプレイしている姿を見かける。今現在、のびゆく高浜の編さんを進めているのだが、そこでも「どんな人がどんな想いで生活しているのか」いったところを表現したいと考えている。ニューカマーについては、新学習指導要領で新しく出てきたところで、まだ書ける部分がほとんどない。のびゆく高浜としても、これから調査し執筆していくところなので、是非、市誌編さんの調査も参考にしていきたい。

【神谷委員長】最近ではベトナムの方が多いと聞いているが、どうか。

【委員】ベトナムも多いが、インドネシアも多い。外国人の全体の流れとして書くのはいいと思うが、国や地域を特定していくと広がりすぎてしまうのではないか。

【曲田副委員長】歴史の本なので、ある程度変遷が追えるということは大事にしていきたいと思う。

【委員】第6章第4節に集団就職・炭鉱離職者の暮らしとあるが、集団就職については、瓦工場に九州から来たという話を聞いており、炭鉱離職者についても北海道や九州などから出てきて、市内の団地に住んだという話を聞いているが、そういったことを書くのか？

【事務局】窯業との関わりなどで、高浜に外から入ってきた方の視点で書く予定。ただ、このタイトルについてはまだ不確定である。

【委員】厳しい生活をしてきて、こういう風に言って欲しくない人、聞かれない人もいるだろうと思う。差別用語になる可能性もある。

【曲田副委員長】言葉としては不都合があるかも知れない。もう少し表現を変えなければいけない。現時点ではあくまでイメージなので、最終的な表現はもう少し精査する。

【委員】先ほどから曲田先生の話聞いていて非常に参考になると思ったことがある。はじめは、炭鉱離職者や外国人の話が本当にこの市誌に必要なのかと思っていた。ただし、インデックスとしてこの市誌を活用するという視点で、人口が増えていくプロセスの中で、

こういう方たちがいらっしゃるということ客観的に表現できるなら、とても有益な情報になると思う。一般的な「読み物」としての市史ではなく、「インデックス」として市誌を使うという発想はとても面白いと思う。

【曲田副委員長】今回の市誌は、見開きで完結させるのが理想的。出典は必ず同ページに載せようと考えている。巻末にまとめて出典を載せると大変見にくい。そうすると、文章の文字数は随分減ってしまうと思うが、その分内容を精査していく。

(4) 全体スケジュールについて

<事務局 資料3に基づき説明>

※特に意見なし

(5) 「たかはま 歴史・まちづくりシンポジウム」について

<事務局 別紙（シンポジウムチラシ）に基づき説明>

【曲田副委員長】この高浜市誌に携わるにあたり危惧したのが、過去に発行された、内容が非常に豊富な高浜市誌をどのように乗り越えていくかということ。年々瓦産業自体が厳しくなり、本文の書き方は難しい。しかし、過去を振り返ると、高浜市は瓦産業に支えられていたと言っても過言ではないような形で経済が動いていた。そこで、今回のようなシンポジウムを通して、もう一度みんなで高浜の窯業について考えようという動きを大切にしたいと思っている。各部会長には、各時代・分野ではどのように窯業を考えるのかを示してほしいと要望を出しており、市民にそれを最初に伝えるのがこの場だと伝えている。基調講演をいただく宮川先生は大変立派な先生で、とても壮大な話になるであろう。経済から芸術まで、文化全体を作っていかなければいけないというような壮大な話になるだろう。瓦の話聞きに来たら、こんな所まで話が進むのかというような話になるだろう。これまでになかったようなシンポジウムになるのではないかと思うので、是非多くの方に集まっていただき、たくさんの意見を頂戴したい。先日の部会長会議でも話しをしたのだが、フロアからどんどん意見がでるようなシンポジウムにしたいと思う。

4. その他

【委員】郷土資料館の調査がほぼ終わったということで、写真撮影を行ったり、目録が作られている。古い写真や地図などを見たいと要望を出しているがなかなか実現しない。い

つ頃見せてもらえるのか、または難しいのか教えてもらいたい。

【事務局】今現在まだ整理中でリストも更新中なので、現段階でネット上で公開したりということとはできない。ただ、いずれは公開できるように整備していきたい。先日の部会長会議でも示したのだが、今後調査執筆員・調査協力員の方にはリストを送ることにしているので、資料の所在を確認した上で、職員や臨時職員に相談いただきたい。

【委員】高浜市の財産なので、なるべく囲まらずに開示してもらいたい。

【委員】囲むつもりはない。まだコントロールができていないだけ。

【事務局】まずは、市が何を所有しているのかを把握することが最優先なので、その後の活用というところまですぐに動けておらず、申し訳ない。

【曲田副委員長】事務局が言った通りで、調査協力員の方にはリストをお見せする。ただ、まだ整理が不十分で、もう少し紐解きながら精査していかないといけない。他の閲覧機関に比べたら、まだまだ精度が低く間違えもあるのだが、そこはご了承いただきたい。なので、ホームページへの掲載などにはとても及ばないことを認識いただきたい。調査協力員の方に使っていただく分には問題ないと思うが、一般の方には誤解を招いたりすることになるので、世に出してもいいのか精査の段階であることは注意していただきたい。

【曲田副委員長】次年度のシンポジウムについてはまた時期を見て説明するが、今のところ考えているのは近代の窯業について。現在、近代の資料が膨大にあるにも関わらず調査が進んでいない状況である。そこを進める意味でも、明治～昭和初期のころの窯業、現在現役の方が知らない時代の窯業を扱いたい。これは、市誌の執筆にも直接生かすことができる内容である。特に、全国的に高浜の土管が有名になったのはなぜなのか、どのように使われていたのかということなどに注目したい。また時期等を含めて事務局と相談し、かわら美術館の展示ともうまく兼ね合いができると、多くの方に参加してもらえるのではないかと考えている。